

『どですかでん』は、1970 年（昭和 45 年）10 月 31 日公開の日本映画である。四騎の会・東宝製作、東宝配給。監督は黒澤明。カラー、スタンダード、140 分。

山本周五郎の小説『季節のない街』を原作とし、貧しくも精一杯生きる小市民の日常を明るいタッチで描いた。黒澤映画初のカラー作品。黒澤が木下恵介・市川崑・小林正樹と結成した四騎の会の第 1 作である。第 44 回キネマ旬報ベスト・テン第 3 位。昭和 45 年度芸術祭優秀賞。

題名

題名は、作中で少年が電車ごっこをするとき口ずさむ「どですかでん」という文句からきている。詳しく言えば、車両がレールの継ぎ目を越えるときの音を模したものである。もともと日本語で成立していた擬音語ではなく、『季節のない街』の原作者、山本周五郎が創作した造語である[1][2][3]。

あらすじ

とある郊外の街の貧しい地域。六ちゃんと呼ばれる少年は、学校にも行かず毎日近所の空き地に出かけては、他人には見えない市電（路面電車）を運転し、その電車の音を「どですかでん」という擬音で表現している。当人は自分が運転手だと本気で信じ込んでいるようで、それを母親は、息子が精神に異常をきたしたと思い嘆くが、六ちゃんは母親の頭のほうがおかしいと考えている。

ヘアブラシ職人の良太郎は、浮気性の妻が不倫の男たちと作った大勢の子供らを、自分の子供として扶養している[4]。日雇い労働者の河口と増田は夫婦交換をして、翌日には何食わぬ顔をして元の家に戻っている[5]。陰気な平さんの所にはある女が訪ねて来るが、この女と平さんとは過去に何かがあった様子。女は平さんの家事手伝いをするが、彼は終始無視していた[5]。廃車に住む乞食の親子は邸宅を建てる夢想話をしているが、子供はしめ鯖にあたって急死する。穏やかな性格で顔面神経症の島さんには無愛想な妻がいるが、妻を愛しており、同僚に妻の文句を言われると激怒する[6]。彫金師のたんばさんは人生の達人といえる人物で、日本刀を振り回す男を鎮めたり、家に押し入った泥棒に金を恵んだりする[4]。アル中の京太は家事手伝いの姪を犯して妊娠させ、姪はショックで恋人の酒屋の店員を刺してしまう[4]。

ここに暮らす人たちは、変わった人ばかりである。六ちゃんはその中で電車を走らせ、日は暮れてゆく。

スタッフ

監督：黒澤明

製作：黒澤明、松江陽一

脚本：黒澤明、小国英雄、橋本忍

企画：四騎の会（黒澤明、木下恵介、市川崑、小林正樹）

原作：山本周五郎『季節のない街』

キャスト

六ちゃん：頭師佳孝、おくにさん：菅井きん、沢上良太郎：三波伸介、沢上みさお：楠侑子

島悠吉：伴淳三郎、ワイフ：丹下キヨ子、井河：日野道夫、野本：下川辰平、初太郎：田中邦衛

良江：吉村実子、益夫：井川比佐志、たつ：沖山秀子（松竹）、綿中京太：松村達雄

妻・おたね：辻伊万里、姪・かつ子：山崎知子、岡部少年（酒店員）：亀谷雅彦、平さん：芥川比呂志

お蝶：奈良岡朋子、乞食の父親：三谷昇、その子：川瀬裕之、渋皮のむけた女：根岸明美

刑事：江角英明、絵描き：加藤和夫、小料理屋の女将：荒木道子、ウェイトレス：塩沢とき